

日韓文化交流基金 NEWS



「朝陽閣」

No. **83** 2017.9.28

Contents

1-5 朝鮮通信使特集

- ・朝鮮通信使関連資料 ユネスコ「世界の記憶」登録へ!
- ・日韓文化交流基金事業と朝鮮通信使との関わりについて(主要年表)
- ・『韓国-信を通ずる旅-21世紀ユース朝鮮通信使の記録』マンガ作品の紹介
- ・朝鮮通信使に関する日韓両国専門家へのインタビュー「朝鮮通信使のユネスコ『世界の記憶』登録と日韓交流の今後について」

6-7 フェロー OBインタビュー

日本大学法学部准教授 小林聡明
獨協大学国際教養学部言語文化学科専任講師 小宮秀陵
韓国・建国大学校政治外交学科助教授 李鉉出
韓国・韓東大学校グローバルリーダーシップ学部助教授 金昶旭

8-9 フェロー研究紹介

日本と韓国の福祉の変化
大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員 湯山篤

10-11 日韓文化交流基金事業報告

青少年交流事業
理事会・評議員会開催
日韓文化交流基金賛助会員制度

12 企画公募

2017年度韓国との間の招へい・派遣事業実施団体選定
に関する企画競争採用案件一覧

朝鮮通信使関連資料 ユネスコ「世界の記憶」登録へ!

江戸時代の間、12回にわたって文化交流使節として朝鮮王朝から日本へ派遣されてきた朝鮮通信使の関連資料111件が、現在、日韓共同でユネスコ「世界の記憶」(世界記憶遺産)へ申請されており、近く登録される見込みです。

朝鮮通信使は、当時の日本と朝鮮が双方の信(よしみ)を確かめ、交隣関係を維持するという意志のもと、続けられてきました。その精神は日韓の相互理解を目的とする当基金の活動にも大いに通じるところがあると思います。実際、当基金はこれまでの学術交流や草の根交流、青少年交流などの事業において朝鮮通信使をテーマとして取りあげ、また訪日、訪韓プログラムにて通信使ゆかりの地を訪問してきました。

今号では、朝鮮通信使特集として、これまで当基金が関わった主な事業を年表にまとめた他、2015年度に実施した「21世紀ユース朝鮮通信使(実施団体:NPO法人日中韓から世界へ)」の一員として参加した大学生によるマンガ作品、「朝鮮通信使ユネスコ『世界の記憶』登録と日韓交流の今後について」をテーマに、当基金とゆかりのある専門家の方々から伺ったお話を紹介します。

朝鮮通信使とは?

15世紀から19世紀、朝鮮国王が日本の武家政権主宰者に対して派遣した使節。江戸時代は、1607～1811年(慶長12～文化8年)に合計12回朝鮮国王の使節が来日した。1655年(明暦元年)以降は徳川将軍の代替りごとの派遣が定例となった。使節の人員は300～500人のぼり、朝鮮・日本側とも多大の経費と労力をかけて準備と接待にあたった。日本各地には通信使に縁のある書籍・芸能・絵画などが遺されており、使節が両国文化交流のうえで大きな役割をはたしたことを示している。

(参照:『山川日本史小辞典』、2016年、山川出版社刊)

公益財団法人 日韓文化交流基金

〒101-0061 東京都千代田区三崎町2丁目21-2 ユニゾ水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 / fax. 03-6261-6780



日韓文化交流基金事業と朝鮮通信使との関わりについて(主要年表)

これまで当基金が実施した事業の中で、朝鮮通信使をテーマに行われたものの一部を年代別にご紹介します。(2016年度末終了分まで、所属・肩書きは当時のものです)

【1980年代】2件(学術会議)

- 1983年12月 日韓文化交流基金設立
- 1987年度 第2回日韓・韓日合同学術会議 論文発表「雨森芳洲と韓国」
(発表者：国際日本文化センター助教授 上垣外憲一氏)
- 1989年 日韓学術文化青少年交流事業開始



【1990年代】4件(フェロー1件、助成3件)

- 1991年 1月 **助成** 日韓通信使シンポジウム
- 1994年 3月 **助成** 三重県津市分部町「唐人踊」日韓交流事業
- 1994年 **訪日フェロー** 「徳川幕府の対朝鮮外交使節の研究」
(全北大史学科 非常勤講師 洪性徳(ホン・ソンドク)氏)

【2000年代】17件(学術会議2件、フェロー4件、助成9件、基金賞1件、青少年交流1件)

- 2001年 2月 韓国青少年訪日団(34名)一行 岡山県牛窓町朝鮮通信使関連施設、滋賀県高月町の雨森芳洲庵を訪問
- 2001年 4月 **助成** 21世紀記念特別展「こころの交流 朝鮮通信使—江戸時代から21世紀へのメッセージ」(於：京都文化博物館)
- 2002年 日韓国民交流年、W杯日韓共同開催
- 2005年 日韓友情年
- 2005年 8月 第6回日韓文化交流基金賞を姜南周(カン・ナムジュ)朝鮮通信使文化事業会執行委員長へ授与
- 2005年11月 **助成** 復活! 朝鮮通信使—国際交流・多文化共生パレードin蔵造りの町並み
- 2009年10月 第9回日韓歴史家会議 報告発表「朝鮮通信使の歴史的象徴性の検討」(報告者：韓国・江原大 孫承喆(ソン・スンチョル)教授)



【2010年代】39件(役員代表訪韓団1件、日韓交流おまつり1件、日韓国交正常化50年記念行事1件、フェロー2件、助成・企画公募23件、基金賞1件、青少年交流9件、講演会1件)

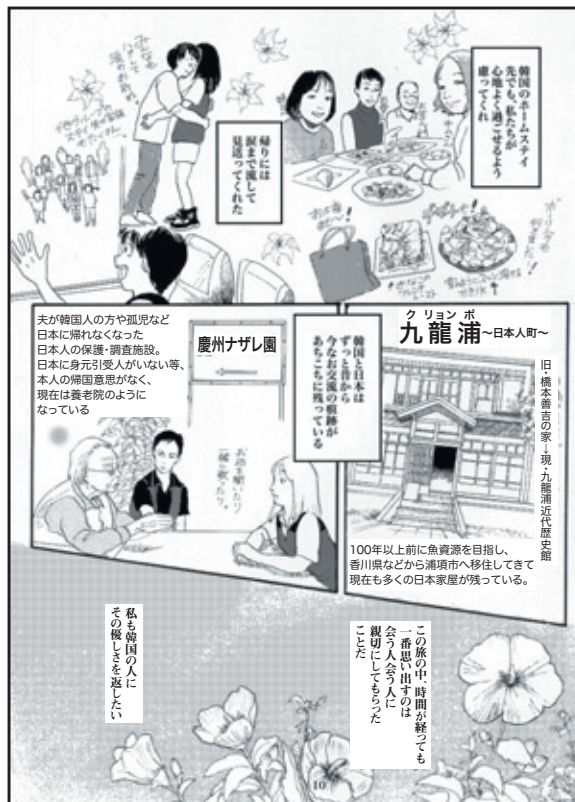
- 2013年11月 韓国大学生訪日団(30名)が雨森芳洲庵を訪問。平井茂彦館長から朝鮮通信使の歴史や日韓交流の大切さについて話を聴く。
- 2014年 9月 第30回日韓文化交流基金役員代表団韓国訪問時に朝鮮通信使歴史館を訪問
- 2015年 日韓国交正常化50年
- 2015年 1月 **助成** 朝鮮通信使を世界記憶遺産に登録するための日韓学術検討会議
- 2015年 9月 日韓交流おまつりin Tokyoオープニングイベントに「21世紀ユース朝鮮通信使」参加学生たちが朝鮮通信使の姿に扮し国書交換式を再現。また、おまつりに初出展の当基金ブースにて朝鮮通信使衣裳の試着体験を実施。
- 2015年12月 基金講演会開催「朝鮮通信使と徳川家康の平和外交」(講師：評論家 金両基(キム・ヤンキ)氏)
- 2016年 9月 第17回日韓文化交流基金賞を朝鮮通信使学会へ授与



上記を含めて2016年度末現在、計62件(役員代表訪韓団1件、日韓交流おまつり1件、日韓国交正常化50年記念行事1件、学術会議4件、フェロー7件、助成・企画公募35件、基金賞2件、青少年交流10件、基金講演会1件)の事業を実施いたしました。

『韓国一信を通わす旅—21世紀ユース朝鮮通信使の記録』マンガ作品の紹介

2015年度に当基金にて実施した青少年交流のテーマ別事業にて、21世紀のユース朝鮮通信使大学生訪韓・訪日研修団（実施団体：NPO法人日中韓から世界へ）に参加した馬返順子さんが描いた記録マンガ作品の一部を紹介します。当基金ホームページ（URL：http://www.jkcf.or.jp）で全ページPDFファイルにてご覧いただけます。



〈作者からの一言〉

韓国には教科書やテレビといった媒体でしか触れたことがなく、今回の初訪韓により、自分の身体で韓国の空気を感じることができたのは貴重な体験でした。朝鮮通信使を辿るという企画であったからこそ、日本と韓国の似通った部分や異なる部分を実感することができたと思います。訪韓団、訪日団の仲間がみんな積極的に交流してお互いを知ろうとする姿も印象的で、いつでもその姿勢を持てれば、異文化を学びあった過去の朝鮮通信使が現在にも通じうると思えました。

PROFILE

馬返 順子（まがえし・じゅんこ）

1991年生まれ。訪韓時は京都精華大学マンガ学部4年に在籍。現在は挿絵などのイラストレーターとして活動。



朝鮮通信使に関する日韓両国専門家へのインタビュー

「朝鮮通信使のユネスコ『世界の記憶』登録と日韓交流の

**雨森芳洲の教えが、日韓の未来を照らす灯台の
明かりとなるように**

雨森芳洲は自らの命を5年縮める覚悟で朝鮮語を学び、朝鮮への理解を深め、第8、9回の朝鮮通信使を迎えるために尽力しました。その芳洲の功績を伝える施設の館長として、芳洲庵を訪れた人々に朝鮮通信使について講話を行ったり、雨森芳洲に関する書籍（自費出版『雨森芳洲』、『芳洲先生』）にまとめて紹介したりしたほか、朝鮮通信使に親しんでもらえるよう「かるた」、「すごろく」、「紙芝居」などを手作りし、子どもたちが遊びながら親しめるよう努めてきました。



雨森芳洲庵にて平井茂彦館長（当時、写真正面左から二人目）より朝鮮通信使について説明を聞く大学生訪日団一行、写真右側には手作りのすごろくも飾られている。

以前は、朝鮮通信使については、それほど多くの人に知られておらず、朝鮮通信使についての価値も必ずしも高く認知されていませんでした。滋賀県琵琶湖の東側には「朝鮮人街道」と呼ばれる道があります。しかしそのように呼ばれるようになった歴史を知る人が驚くほど少なかったのです。そこで、「朝鮮通信使街道」という呼び名も併用することで、通信使の往来のあった道であるとの歴史を正しく理解してもらえよう努めるなど、朝鮮通信使の意味や通信使を通して見られる雨森芳洲の「相手国への理解」と「誠信の交わり」の心を少しでも現代に受け継ぎ、友好と平和のために草の根で貢献していきたいという思いで活動を続けてきました。

1990年に当時の盧泰愚（ノ・テウ）大統領が日本を訪れた際の宮中晩さん会で、雨森芳洲の功績について触れられ、メディアでも大きく取り上げられました。その後、サッカーワールドカップの日韓共催や韓流ブームなどを経て今に至るまで、両国関係は良好な時期もあればそうで

ない時期もありましたが、地元の滋賀県高月町（現・長浜市）で行われている「現代版青少年通信使」交流事業では、30年以上にわたって、日韓双方での青少年の訪問を続けており、相互理解や友情・友好を広げてきました。



芳洲に関する資料が並ぶ雨森芳洲庵の展示室内部

今回、朝鮮通信使関連資料がユネスコ「世界の記憶」に登録されることによって、より一層広く知られることになり、このことは朝鮮通信使とゆかりのある地域の関係者の誇りや自信につながることで期待しています。また、最近通信使の足跡をたどって日本を訪れる韓国の青少年が増えています。一方で日本から韓国の通信使の足跡を訪れる人はあまりいないのではないかと思います。

友好・交流の使節団として朝鮮通信使に関わる遺産が「世界の記憶」として、登録されることは、これからの日韓の若者たちにとって、友好・交流の拠り所となり、とても有意義なものであると思います。

日韓の歴史は不幸なことが取り上げられることが多いですが、朝鮮通信使の時代は争いの少ない時代でした。これら通信使の足跡を学び、信を通じることを絶やさず、若者たちが相互理解を深め未来志向の関係を築いていくことを願っています。

PROFILE



平井 茂彦（ひらい・しげひこ）

1945年滋賀県伊香郡高月町雨森に生まれる。滋賀県立伊香高校卒業後、高月町役場勤務。雨森芳洲庵建設や高月町と韓国・釜山市の小学校の姉妹校縁組など手がける。日本国内の朝鮮通信使にゆかりのある自治体や団体で構成される朝鮮通信使縁地連絡協議会の設立時から運営に尽力。2009年には雨森芳洲庵を中心に行っている日韓青少年交流事業が高円宮記念日韓交流基金の第1回顕彰事業を受賞。2003年4月から2017年7月まで雨森芳洲庵の館長を務める。

今後について」

朝鮮通信使関連資料が「世界の記憶」に登録される見込みとなったことを受けて日韓交流の今後にどうつなげていく必要があるか、両国の専門家に聞きました。日本側からは東アジア交流ハウス雨森芳洲庵で今年7月まで14年にわたり館長を務めてこられた平井茂彦さん、韓国側からは長年朝鮮通信使をテーマに研究活動を行ってきた釜山大学校国語国文学科の韓泰文（ハン・テムン）教授に、それぞれお話を伺いました。

近くてさらに愛情あふれる隣人となるために

1995年「朝鮮後期通信使行文学研究」をテーマに博士学位を取得したのをはじめとして、朝鮮通信使文化事業会（2002年設立）や朝鮮通信使学会（2005年設立）などの団体で学術委員等の役員を務め、朝鮮通信使に関連した発表や講演、図録編纂など、20年以上、朝鮮通信使を広く知らしめる活動に携わってきました。

研究を始めたころは、インターネットで朝鮮通信使に関する情報を得ようとしても、星をつかむようなもので、検索結果として出てくるものも、「朝鮮」や「通信」のみにヒットして出てくる新聞社の名前であったり、携帯電話会社の名前程度という状態でした。

今や朝鮮通信使と検索すると、あふれんばかりの情報が得られるようになり、韓国では小学生から大人まで、朝鮮通信使という単語を見慣れないということは無くなりました。

今回、ユネスコ「世界の記憶」に登録される見込みとなりましたが、日韓共同で申請するまでの道のりは容易ではありませんでした。日韓関係を考慮した場合や、共同申請の手続きは政府レベルではなく両国の民間団体が中心となって行っていることもあり、周りからは「本当に申請書をきちんと提出できるであろうか」との反応がもっぱらでした。

朝鮮通信使に関連する研究や活動をする間、日韓関係は良い時期もあればそうでない時期もあり、むしろ良くない時期が多かったように感じます。そのような状況になるたびに朝鮮通信使交流事業をはじめとした両国の民間交流事業も共に影響を受けることが最も残念なことでありました。

しかし、今回の申請にあたっては、釜山文化財団と日本のNPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会は、共に揺ぎ無い仲間として、互いに協力、励まし合いながら進めてきました。だからこそ、共同申請を実現することができたと思います。

また、共同申請にあたっては、客観的事実のみを扱うことを心がけ、朝鮮通信使が持つ歴史的価値に焦点をあててことで双方が合意し作業にあたったことも大きいと思います。これは、朝鮮通信使研究者である両国の学者たちの良心と公平無私の精神をもってこそできた事であると確信しています。



2016年9月に行われた第17回日韓文化交流基金賞贈呈式にて（写真右端が韓泰文氏、写真左端は長瀬安政駐韓日本大使、中央は朝鮮通信使学会の姜大敏（カン・デミン）会長）

朝鮮通信使関連資料のユネスコ「世界の記憶」への登録は、朝鮮通信使についての両国国民の関心がさらに高まる契機になり、さらに新しい資料の発見、史跡探訪、歴史的価値に再び光が当てられることになるでしょう。

私は研究者として、歴史的客観性を確保するためには、自分で直接現場を訪れ、経験し確認することが大切であるとの信念のもと、研究に取り組んできました。

また、人と人との関係は基本的に「出会い」から始まります。出会わなければ相手を知ることが出来ず、不要な誤解も生じたりします。出会うことで相手とのつながりができ、さらにつながりは真の理解へととなります。朝鮮通信使はこれらを昔から実践していました。すなわち朝鮮通信使は真の心の交流を通じて、相手への無知や偏見を克服し、相互理解の友好関係を形成していった、国際外交上珍しい文化使節でありました。

これからの両国の国民、特に次世代の若者たちは「出会い」を通じて相互理解を、さらには260年の間、平和関係を維持することができた朝鮮通信使を通じた両国交流の精神を継承していく必要があると思います。このようになれば、日韓両国は「近くて遠い国」ではなく、「近くてさらに愛情あふれる隣人」となることでしょう。

PROFILE



韓 泰文（ハン・テムン）

1963年生まれ。釜山大学校人文大学国語国文学科卒業、釜山大学校大学院国語国文学科博士課程修了（文学博士）。1996年より、釜山大学校人文大学国語国文学科教授を務める。2005年からは朝鮮通信使学会（第17回日韓文化交流基金賞受賞団体）総務理事を務める。2003年度、2013年度と日韓文化交流基金訪日フェローとして朝鮮通信使関連の滞在研究を行う。

インプットとアウトプットの同時作業を目指して



日本大学
法学部准教授

小林 聡明

(2010年度派遣フェロー)

私が訪韓フェローシップに応募したのは、2009年秋のことだった。博士論文の執筆をほぼ終え、2010年3月に博士号を取得できるとの見込みがついた頃であった。フェロー応募には、博士号取得後、韓国で滞在研究を行ってみたいという、強い願いが込められていた。幸運なことに2010年度の訪韓フェローに採用され、2010年4月からソウル大学言論情報研究所での研究をスタートさせることができた。

研究テーマは、「米軍政期南朝鮮における情報政策研究」であった。それは、博士論文のテーマをふくらませたものであり、広報文化外交研究という新たな分野への取組へと結実させていった。訪韓研究を土台として、現在は、冷戦期東アジアの心理戦／情報戦について研究している。

私は、訪韓研究に際して、インプットとアウトプットの両方を行おうと心に決めていた。これまで数度の韓国留学が、いずれもインプット作業で終わっていたとの反省の念を抱いていたからである。主なインプット作業は、史料収集であった。国史編纂委員会や国立中央図書館、外交史料館の史料所蔵状況や閲覧環境は、効率的な史料収集を可能にしてくれた。

アウトプット作業とは、韓国語で学会・シンポジウム発表を行い、韓国のジャーナルに投稿することであった。これらは、依然としてネイティブ・チェックが必須なレベルであるが、韓国語による成果発表は苦にならない程度にはなった。何よりもアウトプット作業によって得られた最大の喜びは、韓国人研究者が私の論文を読み、研究発表を聞いて、直接、コメントや意見をくれることであった。こうした日韓研究者間での対話や意見交換は、現在まで続いている。

訪韓フェローシップは、多くの優れた韓国人研究者との出会いを提供し、知的対話の機会を与えてくれた。それは、私の研究者人生にとって重要な資産となっている。こうした資産をしっかりと「運用」することで、研究を通じた社会的・学問的貢献のみならず、日韓の信頼関係を構築していくことが、私の責務と考えている。

PROFILE

小林 聡明 (こばやし・そうめい)

専門は東アジア国際政治史、メディア・ジャーナリズム史、朝鮮半島地域研究。現在、「冷戦期東アジアの心理戦／情報戦」と「歴史和解とメディア」に関する研究に取り組んでいる。2010年、一橋大学にて博士号(社会学)取得。日本大学法学部専任講師を経て、2017年より現職。

他分野の研究者との交流



獨協大学
国際教養学部言語文化学科専任講師

小宮 秀陵

(2012年度派遣フェロー)

日韓文化交流基金（以下「基金」）のフェローとしてソウル大学校人文大学で研究を行ったのは、2012年4月から2013年2月のことである。当時は「9～10世紀東アジアにおける対唐外交の変容と地域社会の形成～『桂苑筆耕集』と金石資料を端緒にして～」というテーマで研究していた。韓国の大学に所属している日本の若手研究者は資金援助を受けられる機会が少ないため、基金のフェローは博士課程まで研究を続けていくという学生にとって大変貴重なものである。以前から韓国の大学に籍を置いて研究活動に勤しんでいた私自身も、博士論文を執筆する時に基金のフェローを受けることができ、大変ありがたかった記憶がある。

韓国古代史の分野では、これまで韓国の研究者と韓国語で議論ができれば問題なかったが、今では韓国語でペーパーを作成することが要求されるようになっている。それは、日本の研究者が韓国の人たちに何か訴えかける研究というものが必要になってきているからでもある。そのため、韓国に滞在しながら韓国の研究をいち早くケアすると同時に、学会で発表し韓国の研究者と交流を深めていくことが重要になっている。そういった文脈の中で、私は研究対象国での滞在研究の必要性を強く感じている。

昨今、特に学問分野の融合が進んでおり、研究者に限らず多岐にわたる分野の方々と交流やふれあいが、研究者としての人生を歩んでいく上で極めて重要なのではないかなと思う。私は基金のフェローがあったからこそ韓国の様々な学会で発表し、韓国の研究者との交流が増え、フェロー参加者との個人的な交流を持つことができた。また、他分野の方との交流を通じて多様な意見から刺激を受けることもできたと言える。

当時の研究を基盤に、現在は古代東アジアにおける韓国と中国との関係、具体的には「遣唐使」をテーマに扱っているが、将来的には日本の遣唐使と朝鮮半島の遣唐使を比較して、東アジアの外交使節の特徴を明らかにしていきたい。

PROFILE

小宮 秀陵 (こみや・ひでたか)

専門は韓国古代史、東アジア史。派遣フェローとしてソウル大学校人文大学国史学科で研究（2012.4～2013.2）。2014年ソウル大学校にて博士号(文学)取得。その後(韓国)啓明大学校国際地域学部招聘助教授を経て、2017年より現職。

日韓文化交流基金のフェローシップ事業では、日本と韓国の優れた研究者700名以上を招聘・派遣し、相手国での滞在研究を支援してきました。今号では、これまで当基金の招聘・派遣フェローシップを利用して日本・韓国で研究された研究者4名に、当基金のフェローシップがご自身の研究生活に与えた影響等について伺いました。

持続可能な社会に向けて日韓共同で取り組む



韓国・建国大学校
政治外交学科助教授

李 鉉 出
(2017年度招聘フェロー)

私は現在、人口問題が政治に与える影響について日韓文化交流基金の招聘フェローとして学習院大学法学部で研究している。少子高齢化が進む中、代議制民主主義と福祉問題が新しい葛藤を迎えている状況において、高齢者の急速な増加がもたらす様々な政治的問題、いわゆるシルバー民主主義というものに対する考え方を整理している。また、地域人口構造が国の持続可能な発展にどのような影響を与えるのかについて、日本と韓国の事例をもとに調査を進めている。日本の東京一極化と韓国の首都圏一極化は同様に展開しながら政治行政的に重要な課題を残しており、制度的な対応方法の必要性が高まってきている。

今回の研究は日本が課題先進国であるため、日本が今まさに経験している状況について研究するためには現地調査が必要だった。日本は人口の高齢化においては世界トップであり、その経験はこれから同じ経験を迎える国に多くの示唆点を与えている。

滞在中、数多くの資料を参照しながら、日本は1980年代から人口問題について研究を進めてきたことを知った。また、大学生が人口問題について活発に討論している姿を見て驚くと同時に、若者が人口問題を自分たちの抱える社会的な問題として認識していることに感心した。韓国はまだ日本の水準には至っていないが、少子高齢化が非常に速いスピードで進行しており、今回の現地調査はこれからの研究に大変意味のある機会となった。大学で研究室を与えていただき、受入研究者の先生と意見交換を重ねることで研究が興隆したことも感謝している。

今までの民主主義は西洋の制度に基づいて進んできたが、昨今、以前は全く予想だになかった種々の問題が日本と韓国で起こっている。代議制民主主義が直面している新しい状況に対して東洋的な文脈で解決策を模索していくことが求められており、これからの持続可能な社会の発展のためには日韓両国が共同で取り組む姿勢が必要である。文化的背景が類似した日本と韓国を対象に、民主的制度を理解解釈する学問風土が期待される。

PROFILE

李 鉉出 (イ・ヒョンチュル)

専門は比較政治。招聘フェローとして学習院大学法学部で研究(2017.6～8)。1997年(韓国)建国大学大学院にて博士号(政治学)取得。韓国政党学会会長、韓国国会立法調査処審議官、中央選挙管理委員会諮問委員、国会憲法改正特委諮問委員等を歴任、2017年より現職。

フェローとしての滞在研究が実を結ぶ



韓国・韓東大学校グローバル・リーダーシップ学部助教授

金 昶 旭
(2012年度招聘フェロー)

日韓文化交流基金のフェローとして、2012年10月～2013年8月まで東京大学大学院情報学環・学際情報学府で研究を行った。研究テーマは「韓日における創造都市政策に関する比較研究」であった。「産業」ではなく「文化」を中心に都市を再構造化するという新しい都市政策のパラダイムである「創造都市政策(Creative City Policy)」のグローバル化は、東アジアの都市にどのように受容されているのかという研究問題を中心に、韓国のソウルや日本の横浜の政策を比較する研究を行った。このような研究を行うためには、多様な創造都市政策参加者(都市行政家、市民団体、企業、NPO、芸術家など)との深層インタビュー調査、及び多様な創造都市政策関連イベント、フェスティバル、キャンペーンなどへの参与観察を行う必要があった。

当時、米国で博士課程に在籍中の大学院生として両国を比較研究することは、学問的な側面だけではなく、経済的にも容易ではないことだった。特に日韓を比較する研究を支援してくれる研究財団は多くないのが実情だった。その時、日韓比較研究を行っている先輩から日韓文化交流基金のフェローシッププログラムの紹介を受け、フィールド研究に必要な財政的な問題を解決できるようになった。

当時のフィールド研究を基盤にした博士論文「Assembling Creative Cities in Seoul and Yokohama: Rebranding East Asian Urbanism」は、2017年国際コミュニケーション学会で最優秀博士論文賞を受賞することになったが、論文賞の委員会は選定の主な理由として、大学院生としては容易でない比較研究を上手に遂行したという点を挙げた。

当時、他の研究財団とは異なり、比較研究にも広く門戸を開いている日韓文化交流基金のフェローシッププログラムがなかったとしたら、大学院生の私には比較研究をすることは無理だったかもしれない。また、その場合、私の博士論文は全く違う方向に流れていたかもしれない。

このような面で日韓文化交流基金がこれからも対韓、対日研究だけではなく、日韓比較研究にも積極的に支援し続けるのであれば、より新鮮な研究を数多く生み出すことができるだろう。

PROFILE

金 昶旭 (キム・チャンウク)

専門は文化社会学、文化政策。主要研究テーマは創造都市政策、創造文化産業の労働。招聘フェローとして、東京大学大学院情報学環・学際情報学府で研究(2012.10～2013.8)。(米国)マサチューセッツ大学アマースト校にて博士号(コミュニケーション学)取得、2016年より現職。

「日本と韓国の福祉の変化」

大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員

湯山 篤

フェロー研究紹介のページでは、各分野の日本研究、韓国研究をされている若手研究者による様々な見解や研究結果をご紹介します。今号では、2015年度に訪韓フェローとして研究された湯山篤氏の研究内容についてご紹介します。

1. 韓国の貧困への関心

私が韓国に興味を持ち始めたのは、2002年でした。サッカーワールドカップの日韓共同開催、韓流ブーム、そして拉致問題といった話題が世間を賑わしていました。2004年には、内閣府の日韓青少年交流事業に参加し、日韓の外交問題や韓国の伝統や文化についても学びましたが、常にぼんやりとしか理解できなかったのが韓国の人々の「暮らし」でした。ソウル駅や永登浦(ヨンドウプ)駅の周辺には常に路上生活者が目立っていましたし、ソウルの中心部の鐘路(チョンノ)の裏通りには整備の遅れた古びた住居が数多く残っていましたが、そうした問題の輪郭がつかめなかったのです。

日本では貧困問題がマスコミの注目を集めていましたので、韓国の人々の貧困にも自然と関心が向かいました。韓国の人々が貧困の問題をどう考えているのか、貧困の問題にどう対処してきたのかを知りたくなりました。躍動感のあるソウルの一角にぼんやりと存在する貧困の光景をもう少しはっきりと理解したいという思いが強まりました。欧米と東アジアの福祉の違い、日本と韓国の介護や児童福祉の違いなどについてひとつずつ学びながら、いよいよ本格的に韓国の貧困問題の真相に踏み込もうという時に、研究を支えて下さったのが日韓文化交流基金のフェローシップでした。

2. 経済成長の光と陰

日本は、第二次世界大戦の戦禍を乗り越え、1950年代中頃から経済規模を飛躍的に拡大させました。韓国もまた、朝鮮戦争の焼け跡から立ち上がり、1960年代から速いテンポの経済開発を成功させました。日本や韓国の急速な経済成長は、ドイツやフランスの戦後の発展にも引けを取らない「奇跡」でした。日本は「経済大国」と呼ばれるまでに発展し、韓国はシンガポール、台湾、香港とともに「4匹の虎(The Four Asian Tigers)」と呼ばれる躍進を見せました。とはいえ、残念ながら、日本や韓国の福祉はヨーロッパの先進国のようには伸びませんでした。日本や韓国は長寿を誇る国にはなりましたが、貧困層は苦しい生活を強いられてきたのです。

特に、日本や韓国は稼働年齢層に福祉給付を与えない厳格な姿勢を貫きました。働ける人には福祉給付を与えず、とにかく労働を求めたのです。ヨーロッパで見られるような「失業扶助」(失業保険でカバーできない失業者に対し、税金を財源として支給される給付金)が無かったのです。さらに、貧困層に対する「最後のセーフティネット」も手薄でした。日本では、オイルショックを経て1980年代に入ると、極貧層のための公的扶助(生活保護法)の支出さえ削減しようとしたし、韓国では、1990年代の終わりまで、65歳未満の「働ける者」を公的扶助制度(生活保護法。現在の国民基礎生活保障法)の対象から除外していたのです。



ソウル駅の地下道に設置されたホームレス一時宿泊施設
(撮影：大阪市立大学都市研究プラザ研究チーム)



鐘路の低廉な民間賃貸住宅
(撮影：大阪市立大学都市研究プラザ研究チーム)

特に、韓国では稼働年齢層向けの福祉給付がほぼ皆無でしたので、貧しい人々は劣悪ではあっても安価な住居を求めて、バラック集落や「チョッパン」（狭い部屋をさらに間切りした非常に狭い賃貸住宅）で暮らすことを強いられました。今ではだいぶ影を潜めましたが、ソウルに散在していたバラック集落の存在こそがソウルの貧困層の生活を支えてきたのです。福祉をあてにできない韓国で、貧困層がどうにか生き延びてこれたからくりは、そこにありました。日本で言えば、大阪の釜ヶ崎地域や東京の山谷地域に近いかもしれません。

3. 東アジアの福祉の特徴

それにしても、日本や韓国は1990年代の中頃まで好調な経済と強力な解雇規制を背景に失業率を低く保ってきたとはいえ、なぜヨーロッパに比べて福祉の発展が遅れたのでしょうか。欧米では、1970年代から福祉の発展を促す要因についての研究が続いてきました。1980年代に入ると「労働組合や左派政権の影響力が強い国で福祉が発展した」という説明が広く支持を集めました。

さらに、1990年代に入ると、これを発展させて「不況にも関わらず北欧国家が平等な社会を維持してきた理由」や、「豊かな国であるアメリカで福祉が低調な理由」を説明する研究があらわれました。こうした研究の対象はあくまで欧米の国々でしたが、1990年代の中頃から日本、韓国、シンガポール、台湾、香港といった東アジアの福祉に言及する研究も出てきています。東アジアの各政府が、公的年金のような社会保険制度を「一般市民の権利」ではなく「経済を支える中心集団の特権」として提供する傾向があったこと、失業の問題を失業給付などの現金給付で解決する代わりに解雇規制で対処してきたこと、子どもや高齢者のケアを社会サービスよりは家族によるケアでカバーしてきたことなどを指摘してきたのです。欧米の議論にもとづいて、日本や韓国では労働組合やそれを代表する左派政権が主導権を握れなかったので福祉の発達が遅れた、と説明した研究もありました。

4. 日本と韓国の新しい福祉

最近、特に興味深いのは、日本と韓国で福祉政策の拡充が急速に進んでいる理由です。私が今、特に関心を持っているのもこの部分です。日本や韓国をはじめとする東アジアの政府は、子どもや高齢者のケア、および「生産的でないセクター（失業者、高齢者、女性、子どもなど）」への所得保障を「経済への負担」として避ける傾向があるとされてきましたが、1997年のアジア通貨危機ごろからこれに改善が見られるのです。特に、日本と韓国は2000年代に入るまで、働ける人には「仕事」を、働けない人には「福祉」を、という厳格な区別を守ってきましたが、このところ働ける人々にも「福祉」でサポートしながら雇用へとつなげる柔軟な支援を見せはじめています。

例えば、日本では2000年代に入って以前よりも稼働年齢層の生活保護に寛容な姿勢を見せており、長期失業者向けの失業扶助として求職者支援法を導入する積極的な動きも見せて

います。また、韓国では、1999年の国民基礎生活保障制度導入で稼働年齢層向けの給付を整備したばかりか、2014年に公的扶助を受給するための所得条件を大幅に緩和しており、2004年、2006年、2008年には公的扶助の扶養義務を緩和する改正を立て続けに行ってきました。日本や韓国が福祉を拡大させているのはなぜでしょうか。

第一に、景気の悪化に伴い貧困問題が拡大したことは、福祉の拡大を促す契機となりました。ただ、これだけでは十分な説明にはなりません。これまでの多くの先行研究が強調してきたように、貧困層がいるからといってそれに丁寧に対応する国ではなかったからです。

第二に、福祉の拡大にとって重要だったのは、日本と韓国で政治の様相が大きく変化したことでしょう。日本は1993年に「55年体制」の終息とともに「ソフトな民主化」を経験し、韓国は1987年の大統領直接選挙制導入を機に「民主化」へと大きく舵を切りました。これにより、政治が有権者の声に敏感になりました。少子高齢化、産業構造の変化、女性の社会進出など、社会環境の変化の中、失業者、高齢者、女性、子ども向けの福祉政策を求める有権者の声が政治に反映されるようになったのです。

第三に、福祉の拡大にとって重要だったのは、日本と韓国で貧困層を擁護する勢力が増えたことでしょう。貧困層を擁護する勢力としては、OECDのような国際機関や、福祉研究者、そしてNGOなど様々なアクターが登場しました。OECDは、日本の貧困問題を指摘し、日本政府の対応を促しました。日本の福祉研究者は、生活保護の母子加算廃止に抵抗しました。また、日本の反貧困ネットワークは、ワーキングプアへの対応を引き出す圧力をかけました。韓国でも、福祉研究者やNGOは公的扶助制度の法改正に決定的な役割を果たしました。また、韓国では1975年から2004年までの約30年間で、社会福祉系大学院の数が50倍近くに膨れ上がり、福祉の擁護者を輩出し続けてきたのです。

1990年代後半から2000年代後半にかけて断続的に発生した経済危機は、日韓両国が貧困と向き合う契機となりました。ただ、それ以前から、両国で福祉を擁護する人々が少しずつ増えていたことが非常に重要でした。少子高齢化の進展を背景に、日本や韓国は公的年金、健康保険、介護保険の分野で苦しい局面を迎えていますが、貧困層を保護する公的扶助の分野では両国で福祉が拡大する着実な努力が見られています。

PROFILE



湯山 篤（ゆやま・あつし）

1981年、福島県生まれ。ソウル大学校社会福祉学科博士課程修了。大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員。韓国保健社会研究院海外情報委員。共著に『ホームレス問題の現実と対応—韓国と日本の比較—』（ソウル大学校出版文化院、2014年）など。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2017年度第1四半期（2017年4月1日から6月30日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団 長	計	男	女	期 間	主な訪問先
韓国教員 (第1団)	崔相洛(チェ・サンナク) 蠶賢初等学校校長	20	6	14	6/6～6/15	東京都世田谷区立東玉川小学校、高知県黒潮町立佐賀小学校、佐賀中学校、高知県(高知市、須崎市、幡多郡黒潮町)
韓国教員 (第2団)	金重翰(キム・ジュンハン) 国立国際教育院 教育開発協力チーム教育研究士	20	6	14	6/6～6/15	東京都世田谷区立東玉川小学校、高知県黒潮町立佐賀小学校、佐賀中学校、高知県(高知市、須崎市、幡多郡黒潮町)
韓国教員 (第3団)	李完祐(イ・ワンソク) 首都女子高等学校校長	20	5	15	6/6～6/15	東京都中央区立佃中学校、高知県立中村中学校・高等学校、高知県(高知市、四万十市、香美市)
韓国教員 (第4団)	崔毅億(チェ・ウィオク) 東栢中学校校長	20	9	11	6/6～6/15	東京都中央区立銀座中学校、高知県立中村中学校・高等学校、高知県(高知市、四万十市、香美市)
韓国大学生 (第1団)	許允奭(ホ・ユンソク) 国立国際教育院 企画管理部書記官	20	8	12	6/27～7/6	フェリス女学院大学、中京大学、愛知県(名古屋市、稲沢市)
韓国大学生 (第2団)	曹榮基(チョ・ヨンギ) 国立国際教育院 教育開発協力部行政事務官	20	9	11	6/27～7/6	フェリス女学院大学、中京大学、愛知県(名古屋市、稲沢市)
韓国大学生 (第3団)	金永寅(キム・ヨンイン) 国立国際教育院 教育開発協力部教育研究士	20	8	12	6/27～7/6	東洋大学、和歌山大学、和歌山県(和歌山市、東牟婁郡那智勝浦町、西牟婁郡白浜町)
韓国大学生 (第4団)	崔廣洙(チェ・グァンス) 水原大学校国際協力処長 兼電子材料工学部教授	20	9	11	6/27～7/6	東洋大学、和歌山大学、和歌山県(和歌山市、東牟婁郡那智勝浦町、西牟婁郡白浜町)

教員訪日団(第1、2団)高知・佐賀小学校で児童たちと地震発生に備えた訓練を体験



教員訪日団(第1、2団)高知県内の水産加工品製造会社(鯛けんかま)を訪問、ちくわ作りを体験



教員訪日団(第3団)東京・佃中学校の生徒たちと給食体験



教員訪日団(第3、4団)高知・中村中高で迫力ある書道パフォーマンスを見学

大学生訪日団(第1団)京都宇治にて、各自が点てた抹茶をいただく



大学生訪日団(第2団)能楽師の指導のもと、能で使用する楽器や所作について学ぶ



大学生訪日団(第3団)和歌山県内の情報通信企業(クオリティソフト(株))を見学



大学生訪日団(第4団)和歌山大学にて、日韓の学生同士交流を図る

2 理事会・評議員会開催

6月7日に第73回理事会、6月22日に平成29年度定時評議員会が開催され、平成28年度決算が承認されました。

3 日韓文化交流基金賛助会員制度

日韓文化交流基金は1983年の設立以来、両国国民間の相互理解と信頼を深めるため、青少年交流をはじめ数多くの事業を実施する一方、賛助会員制度を設け助成事業や講演会開催など、趣旨にご賛同いただける多くの方々のご支援を賜りながら、更なる事業活性化を図っております。

2016年度賛助会員リスト (五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)

特別会員 (計6名、1団体)

秋月望 (3) 小野正昭 (3) 金春美 (3) 中江新 (5) 植崎正博 (3) 渡辺浩 (3) 南信州セカンドスクール協会 (3)

個人会員 (81名)

朝海和夫 朝倉敏夫 浅野豊美 阿部孝哉 安倍誠 李炯喆 飯島渉 石川武敏 磯崎典世 稲葉真岐子 猪口孝 林在圭 内田富夫 梅田博之 (匿名希望) 大竹洋子 大野郁彦 (2) 小川裕司 荻野綱男 小倉紀蔵 生越直樹 河村建夫 菅野修一 木畑洋一 木宮正史 小泉勇治郎 小林直人 小針進 (2) 高麗文康 齋木崇人 坂井俊樹 阪田恭代 酒匂康裕 櫻井浩 鮫島章男 (2) 澤岡泰子 柴公也 十五代沈壽官 白川豊 杉山長 鈴木光男 芹川哲世 徐正基 高田加代子 武末純一 田中正敬 崔寧桓 崔吉城 都恩珍 戸塚進也 中塚明 中野照男 中山隆夫 中山めぐみ 並木正芳 芳賀徹 畠山悦美 波田野節子 墨の美術館 濱崎道子 浜之上幸 林史樹 春木育美 (2) 日本民芸館館長 深澤直人 福原裕二 藤田昭造 藤本幸夫 堀泰三 馬定延 松井貞夫 (2) 前田二生 三谷太一郎 三ツ井崇 實生泰介 茂木敏夫 守重知量 山口晃 山根真理 柳震太 尹景徹 余田幸夫 和田とも美

法人会員 (3団体)

真露株式会社 代表取締役社長 楊仁集、広島県日韓親善協会、和光物産株式会社

2017年度韓国との間の招へい・派遣事業実施団体選定に関する企画競争採用案件一覧

昨年に続き、青少年交流事業の一環として、韓国との間での招へい・派遣事業を実施する団体を対象に、企画競争公募を実施しました。今年度は下記の招へい事業10件、派遣事業5件に支援することが決定しました。

招へい事業

事業名	申請団体	開催日時	招へい人数
環境資源を活かした先進的なまちづくりを学ぶ・日韓若者交流リーダー育成事業	特定非営利活動法人グラウンドワーク三島	8/2～8/7	16
未来につなぐ環境プロジェクト―福島再生可能エネルギー事業に学ぶ	特定非営利活動法人ふくかんねつと	9/19～9/28	25
日韓クリエーター交流プロジェクトII	秋田空港利用促進協議会	10/27～11/3	23
JENESYS2017 韓国大学生招へい・交流プログラム「縁」	公益財団法人大阪国際交流センター	11/3～11/12	26
対日理解促進交流プログラム「JENESYS2017」日韓青年の短期招へい・派遣事業―地域医療・看護をテーマとした相互理解促進交流―	一般財団法人日本国際協力センター	11/6～11/14	25
JENESYS2017 韓国高校生・校長招へい事業	一般社団法人国際フレンドシップ協会	11/20～11/28	21
北海道・韓国 地域遺産発掘・発信交流事業	公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター	11/22～12/1	25
静岡県・忠清南道考古学関係者友好交流推進事業	静岡県・忠清南道考古学関係者友好交流実行委員会	12/19～12/25	22
水原市大学生訪日事業	静岡市国際交流協会	1/9～1/18	20
「Visit & Feel JAPAN Tour in 2018 Winter」	一般社団法人日韓経済協会	1/30～2/4	21
年間招へい人数（予定）			224

派遣事業

事業名	申請団体	開催日時	派遣人数
「第24回日韓高校生交流キャンプ」	一般社団法人日韓経済協会	7/24～7/28	44
21世紀のユース日本通信使 日本大学生訪韓団	特定非営利活動法人日中韓から世界へ	9/10～9/19	26
環境資源を活かした先進的なまちづくりを学ぶ・日韓若者交流リーダー育成事業	特定非営利活動法人グラウンドワーク三島	9/18～9/23	16
GO!2018信州総文祭・信州と韓国の高校生による文化交流事業	長野県高等学校文化連盟国際交流部会	12/7～12/12	24
第2回ナノカーボン物質とプラズマライフサイエンスに関する国際ワークショップ	東京都市大学大学院工学研究科生体医工学専攻工学部医用工学科知覚システム工学研究室	12/12～12/20	25
年間派遣人数（予定）			135



表紙写真
紹介

タイトル：「朝陽閣」（撮影：山中亜紀子）

韓国・慶尚北道永川（ヨンチョン）市に位置する朝陽閣は、1368年に当時副使だった李容（イ・ヨン）によって琴湖江（クムホガン）の畔に建てられました。朝陽閣では、釜山へ向かう朝鮮通信使一行の経由地として、餞別の宴や馬上才（朝鮮王朝時代の騎馬術）が披露されました。